

保育・教育学生の自然体験、生活体験の実態と改善の一つの試み

The actual poor experiences of nature and life acquired by the student learning pedagogy and nursing, and an experiment of developing them.

野原由利子 *Yuriko Nohara*

(人間発達学部)

1. 研究の目的と方法

ここ 10 年、テレビ・ビデオ・ゲーム・パソコン・ケイタイなどメディア生活にどっぷりと浸り、自然に触れる経験が著しく少なくなる中、まだかろうじて残っている市街地の自然に関心を寄せる学生は極端に少なくなっている。

里芋と大根の葉の区別がつかない。「そらまめくんのベッド」の絵本を空豆にさわったことも、割ったこともなくて読んでいる。ふきを知らずに「お弁当箱」の手遊びをしている。そして更に深刻なのは、このままではいけないと、実物をみせても「青臭い、汁がでそう、どうやってわるの?」と空豆を割れない、割ろうとしない学生や、サツマイモは地面の中で、縦にロケットのように生えているのだと、写実的に書かれた絵本をみせても「気持ちわる～、私土だめなんだわ～」と目と体を背ける学生が少なからず出てきていることである。

色々な種類の「豆」を見せても、「へ～、これプラスチック?」と恐る恐る触ってみる学生たちを見ると、やはりこんなに自然と離れ、命あるものへの実感が薄れてきていては、人類と地球に異変が起り、その未来に危機が迫っていることを予感せざるをえない。

保育・教育者の養成にあたる者として、何かできることはないか、人間発達学部子ども発達学科立ち上げから 4 年間、①担当講義、②課外活動クラブ、③ゼミナール等で模索してきたことをまとめ、学生の中に生まれてくる変化をみてみたいと思う。

① 担当講義「保育原理」(前・後期通年)では、「生命の逞しさ・神秘」をもっとも明確に把握できる「花から実と種へ、そして芽生え」の実際を中核として、季節に合わせて学生たちに実物を回覧し、視覚・触覚・嗅覚・味覚・聴覚の五感を使って感じ取ってもらうことを試みてきた。

② また、前任校で 25 年間顧問としてかかわってきたクラブ活動を、現任校でも新設学科着任と同時に立ち上げて 4 年目に入っている。

保育者・教育者を目指している学生たちに、自然体験・生活体験を自ら楽しみながら身につけていってほしいと「自然とくらしを楽しむ会」を提案したところ 30 名が入会、今日では 1～4 年生までで 70 名ほどになり、学内外での自然体験や生活体験を楽しんでいる。

③ また、講義や課外クラブ活動で収集・使用した実物をどう保存し、多くの学生や子

どもたちにどう伝えたら楽しく、解りやすいか、モンテッソーリ教育研究ゼミの学生たちと共に、教材・教具化し、保育・教育現場に活かしていただけるように工夫している。

以上の 3 点にわたって、それぞれの実践を写真を交えて整理し、その中での学生たちの変化をアンケート調査によって見てみたい。

2. 学生たちの自然体験の実態 —— 一事例 ——

2010 年 4 月、大部分が保育・教育者を目指して入学してきたと思われる人間発達学部子ども発達学科 1 年生に、これまで木・草花・鳥・昆虫についてどのようにかかわってきたかについて、アンケート調査を行った。集計結果は以下の通りであった。

(1) 木とのかかわりについての調査

表中、O は名前もきいたことがなかった。

A は名前はきいたことがある。

B は見たことはある。

C は触ったことがある。

D は遊んだことがある。

E は飼育した、育てた、あるいは食べたことがある。

* 各欄の数値は母数 (男女学生合計 93 ~ 106) に対する % である。

木の名前	O	A	B	C	D	E
イチヨウ	0	100	93	85	55	0
スズカケノキ	68	31	10	5	4	0
シダレヤナギ	28	70	44	22	9	0
ポプラ	16	84	40	16	3	1
ホオノキ	64	35	9	4	2	0
ニセアカシア	71	27	5	2	0	0
ケヤキ	6	94	50	21	6	1
(イロハ) モミジ	2	98	92	75	48	1
キリ	48	52	20	4	0	0
(オニ) グルミ	80	20	7	2	1	0
トチノキ	64	35	14	2	1	0
クスノキ	4	96	58	17	3	0

(2) 草花とのかかわりについての調査

草の名前	O	A	B	C	D	E
フキ・フキノトウ	5	95	42	24	5	43
ヨモギ	2	98	48	36	6	67
スマレ	0	99	81	44	13	2
ナズナ	11	89	42	28	13	19
セリ	19	81	31	16	6	21
レンゲソウ	11	89	46	27	12	0
シロツメクサ	12	88	64	49	34	0
スイバ	84	16	6	2	0	1
ギシギシ	72	27	8	3	1	0
ドクダミ	2	98	43	26	8	20
オオバコ	33	66	31	18	9	1
イタドリ	73	26	8	3	0	0
アカザ	82	17	6	2	0	0
カラムシ	77	20	5	1	0	0
クズ	61	39	8	2	0	1
セイタカアワダチソウ	72	26	12	7	0	0
アシ	67	31	12	4	0	0
ススキ	3	96	72	50	32	0
ヤマノイモ	66	33	12	7	1	10
アザミ	69	31	10	5	3	2
カラスウリ	57	43	15	9	3	3
ヒガンバナ	19	80	57	32	11	0

(3) 鳥とのかかわりについての調査

鳥の名前	O	A	B	C	D	E
スズメ	0	100	96	28	11	7
キジバト	47	54	33	5	6	1
ハシブトガラス	64	36	25	2	0	0
メジロ	19	80	32	3	1	1
シジュウカラ	65	34	7	0	1	0
コゲラ	78	22	4	0	0	0

モズ	43	56	17	1	0	0
ヒヨドリ	34	66	19	4	1	1
トビ	7	93	39	1	0	0
ウグイス	0	100	74	4	1	0
ヒバリ	21	79	18	0	0	0
ムクドリ	30	69	20	0	0	0
ツバメ	0	100	94	10	4	2
ツグミ	68	31	6	0	0	0
ハクセキレイ	79	21	10	0	1	0
インシギ	91	9	1	0	0	0
カイツブリ	80	18	2	0	0	0
ウミネコ	27	73	23	0	1	0
カルガモ	15	85	47	5	1	0
コサギ	73	27	9	0	0	0
コアジサシ	90	10	1	1	0	0

(4) 昆虫とのかかわりについての調査

昆虫の名前	O	A	B	C	D	E
オオカマキリ	9	91	63	31	13	8
カブトムシ	0	100	97	77	60	58
ノコギリクワガタ	0	100	85	55	40	32
モンシロチョウ	1	99	94	65	43	28
アゲハ	1	99	95	55	32	18
ナナホシテントウムシ	5	95	85	63	33	11
クマゼミ	5	95	83	44	27	12
ミンミンゼミ	1	99	88	47	30	13
アブラゼミ	0	100	82	37	25	13
エンマコオロギ	16	84	47	27	18	16
キリギリス	1	99	61	18	14	10
シオカラトンボ	17	83	55	19	11	5
アキアカネ	35	65	32	10	6	3
シロスジカミキリ	44	56	29	13	9	9
ゴマダラオトシブミ	61	39	6	1	1	1

トノサマバッタ	1	99	77	40	26	10
ショウリョウバッタ	19	81	53	29	22	8
コガネムシ	2	98	57	15	10	5
タマムシ	16	84	32	9	5	2
ホタル	1	99	80	37	25	16

以上のアンケート結果を考察すると、木とのかかわりでは、スズカケノキ、ホオノキ、ニセアカシア、オニグルミ、トチノキなどの「名前も聞いたことがなかった」学生が60名、半数以上もいること。キリ、ポプラでさえ48名、16名が「名前も聞いたことがなかった」と答えている。

草花とのかかわりでは、アカザ、クズ、セイタカアワダチソウ、アシ、ヤマノイモ、アザミの「名前も聞いたことがなかった」学生が60名を越えて多いこと、セリ、ナズナなど春の七草にも無知であることに驚かされる。

鳥とのかかわりではシジュウカラ、ツグミなど、良く聞くのではないかと思われるものでも7割近くの学生が「名前も聞いたことがなかった」と答えている。モズ、ヒヨドリ、ムクドリ、ヒバリからも切り離されて育ってきている者がかなり多いこと、スズメだけが身近な鳥になってしまっている実態が示されている。

昆虫とのかかわりは、「名前は聞いたことがある」が木や草花や鳥よりは多い。しかし、アキアカネ、ショウリョウバッタ、シオカラトンボ、エンマコオロギなどの「名前も聞いたことがなかった」者がかなりの数いる。

以上のような学生の実態から、学校時代に理科や生物で学んだことはあったかも知れないが、自然から切り離されてくらす中で、生き物が遠い存在になってしまい、自然事象、命のいとなみに無知・無関心・無感動になってしまっている様子を窺い知ることができる。

3. 担当科目「保育原理」（1年前期2010年4月～7月）における試み

1) ビデオの活用

① NHK スペシャル「好きなものしか食べない子どもたち」視聴

今日の小学生たちの偏食の多い食生活と栽培活動や調理活動の重要性を理解する。自分の食生活の点検をし、自分の課題を自覚する。

② DVD「田んぼの幼稚園」（神奈川県平塚市 平塚幼稚園）の視聴

日本における田んぼの重要性と苗作りから収穫までの過程の理解。

米作りを通した園・子ども・親たちとの交流・きずなづくりの理解。

2) 自然物の回覧（講義開始時に実物の説明、出欠確認の間に回覧）

花から実へ、そして種へ、又苗の芽吹きへという生命の循環の逞しさ、神秘に気づかせる。

- ① ドングリの種類と芽吹き〈写真 1, 2〉
- ② アカマツのボックリと種、マツボックリの不思議〈写真 3, 4, 5〉
- ③ カラマツのボックリ〈写真 6〉
- ④ ヒノキの実とボックリと種〈写真 7, 8〉
- ⑤ スギのボックリと種〈写真 9〉
- ⑥ メタセコイヤのボックリと種〈写真 10〉
- ⑦ アメリカンファーの実〈写真 11〉
- ⑧ 菜の花と実と種〈写真 12〉
- ⑨ 大根の花と実と種〈写真 13〉
- ⑩ ソラマメの花と実と種(絵本「そらまめくんのベット」の理解)〈写真 14, 15〉
- ⑪ クリの雄花と雌花と若い実〈写真 16, 17, 18〉
- ⑫ トウモロコシの雄花と雌花と若い実〈写真 19, 20, 21〉
- ⑬ フキの葉と茎(手遊び「おべんとばこ」の理解)
- ⑭ ゴボウと実と種(同上)
- ⑮ フウセンカズラの実と種〈写真 22〉
- ⑯ クルミの青い実と変化〈写真 23, 24〉
- ⑰ トチの実の変化〈写真 25〉
- ⑱ フジの実の変化と種〈写真 26, 27〉
- ⑳ ツバキの花と実と種〈写真 28, 29, 30, 31〉
- ㉙ それらの植物の受粉に欠かせない昆虫の役割、特にミツバチの役割を知る。

オオスズメバチに撃滅されるセイヨウミツバチ、オオスズメバチを多勢で囲み、45℃の熱で蒸し焼きにする知恵を長い間に身につけたニホンミツバチ(蜂塊)。

スズメバチの標本〈写真 32〉

4. 課外活動「自然とくらしを楽しむ会」の活動(2010年4月～7月)

- ① 4月 ほたもちづくり
- ② 4月 蒔き割り〈写真 33〉
- ③ 4月 火お越し〈写真 34〉
- ④ 5月 おやきづくり〈写真 35〉
- ⑤ 6月 梅ジュースづくり
- ⑥ 6月 春日村の自然探訪:
いとよ観察
草花遊び

古墳群探訪〈写真 36〉

茶狩り見学

染色工房見学

藍の苗見学

④7月 七夕飾りづくり

⑤7月 すいかちょうちんづくり〈写真 37〉

⑥8月 トヨタ自工・子どもものづくりの会

自然遊びのコーナー担当 野菜スタンプ、麦わらとマカロニのネックレス、葉っぱの写し絵など

⑦8月 長野県木曾 夏季合宿：

そば打ち〈写真 38〉

乗馬〈写真 39〉

溪流釣り〈写真 40〉

じゃがいも掘り、野菜の収穫〈写真 41〉

カレー・サラダづくり

川遊び〈写真 42, 43〉

ほう葉寿司づくり〈写真 44〉

ブルーベリー摘み〈写真 45〉

水木沢原生林探訪

味噌川ダム見学

宿場町、道の駅見学

5. 自然物を教材、教具化したものの回覧

自然物は、季節により移ろい、保管が困難なものも多い。

多忙な保育・教育の場では、必要で可能なものは、できるだけ教材、教具化しておくことも便利で活用しやすい。ゼミナールⅢ、Ⅳでは、モンテッソーリ教育の研究をしていることもあり、次のような工夫例を提示して、自然物の教材・教具作りを試みることを勧めている。1年生にも2010年4月～7月次のようなものを提示してきた。

①日常生活練習

明け移しの練習用具——フウセンカズラの種

ゴーヤの種〈写真 46〉

ヒマワリの種

ジュズダマの種〈写真 47〉

フジの種

②感覚教具

触覚：ひみつ袋 (オニグルミとベルシャグルミ) 〈写真 48〉

嗅覚：ハーブのドライフラワーの匂いあわせ 〈写真 49〉

③文化教具

豆の種類と標本 〈写真 50, 51〉

お米の種類と標本 〈写真 52, 53〉

粉の種類

そばの花と実とそば粉 〈写真 54〉

綿の実 (木綿) とまゆ (真綿) と羊毛の違い 〈写真 55, 56, 57〉

自然物だけで作るリース 〈写真 58〉

色々な木の実の炭焼き 〈写真 59〉

6. 学生本人たちの努力 (1 年生 4 月～7 月の変化)

2010 年 7 月 以上 1～5 の実践ほか他の教員や家族などの影響も受けながら、自然体験・生活体験をどのように増やしていこうとしているかについて、1 年生全員にアンケート調査を行った。

その結果次のような努力がされていることがわかった。

(1) 日常生活での自然とのふれあい	21 名
(2) 自宅での栽培活動	16 名
(3) 「自然とくらしを楽しむ会」クラブ活動への参加	10 名
(4) 「冒険 KIDS」クラブへの参加	8 名
(5) 家事への参加	7 名
(6) 近所の子どもたちとのふれあい	6 名
(7) 祖父母の家での栽培活動や自然の中での散歩	6 名
(8) 自然体験教室やボランティア活動への参加	5 名
(9) 一人暮らしの生活体験	5 名
(10) アルバイトでの社会的体験	5 名
(11) 戸外での遊び	5 名
(12) 自然とのふれあいイベントへの参加	4 名
(13) 自転車通学	4 名
(14) 学童保育・児童館ボランティア	3 名
(15) 苦手な魚や虫の観察	3 名
(16) 親戚での収穫作業と調理活動	3 名
(17) 徒歩通学	2 名

(18) 釣り	2名
(19) 図工の授業の課題（葉の造形）	1名
(20) 幼稚園実習での子どもとの自然遊び	1名
(21) 郷里に帰った時、自然に触れ合う	1名
(22) 図鑑などの復習	1名
(23) 太陽の動きの観察・研究	1名

7. 考察とまとめ

保育・教育は、人間の命の成長を手助けする仕事であり、自分たち自身が人間だけでなく、植物や動物の命の営みに触れ、その逞しさや神秘さに感動し、生きるというエネルギーを子どもたちへも伝えていくことが一つのそして最も根幹的な使命である。

4月入学当初、日常よく触れているはずの身近な木、草花、鳥、虫の名前も聞いたことがないと答えた学生たちも、「保育原理」での実物教育、クラブ活動での体験、その他の授業や大学生となって変わった下宿生活やアルバイト体験などを通し、7月のアンケート調査では、学生自身で自然体験や生活体験を増やそうと努力を始めている学生も多いことがわかった。

しかし、個人の努力のみに任せた場合、周りに自然環境のある学生はすぐ行動に移しているが、恵まれていない学生は、意識の変革の難しさと相俟って、なかなか行動に移しにくい様子が窺える。

今日の保育・教育学生にとって、どのような自然認識・体験や生活認識・生活体験が必要かの討議を経て、教員間のシラバス上での工夫、およびカリキュラムにおける工夫が必要となっていると思われる。

1. 「保育原理」 講義開始時における自然物の説明と回覧



コナラ・マテバシイ・クヌギのどんぐり



クヌギのどんぐりの芽生え



アカマツのボックリと種



湿ると閉じるアカマツボックリ



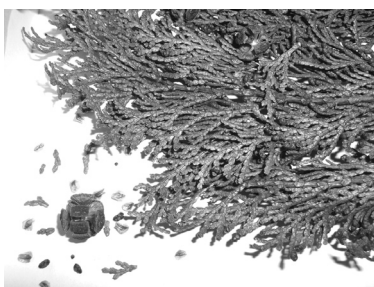
乾いて開いたアカマツボックリ



カラマツのボックリ



ヒノキの実



ヒノキのボックリと種



スギのボックリ



メタセコイアのボックリ



アメリカンフーの実



菜の花と実



大根の花と実



空豆の花



空豆の実と種



クリの雄花



クリの雌花



クリの若い実



トウモロコシの雄花



トウモロコシの雌花



トウモロコシの若い実



ゴボウの実



フウセンカズラの実と種



クルミの青い実



クルミの実の変化



トチの実の変化



藤の実の変化



藤の実と種



ツバキの花



ツバキの実



ツバキの実と種



ツバキの種



スズメバチの観察

2. 課外活動「自然とくらしを楽しむ会」の活動



まき割り



火おこし



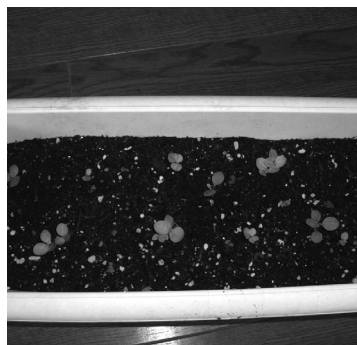
おやきづくり



梅ジュースづくり



古墳探訪



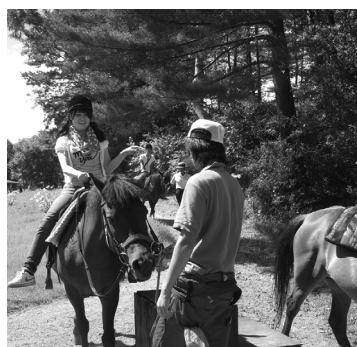
藍の苗見学



すいかちょうちんづくり



そば打ち



乗馬



溪流釣り



野菜の収穫



川遊び



びしょぬれで



ホウ葉寿司づくり



ブルーベリー摘み

3. 自然物の教材・教具化



ゴーヤの種



ジュズ玉



豆の色々



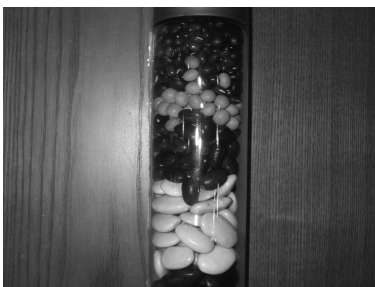
オニグルミとベルシャグルミ



ドライハーブの匂いあて



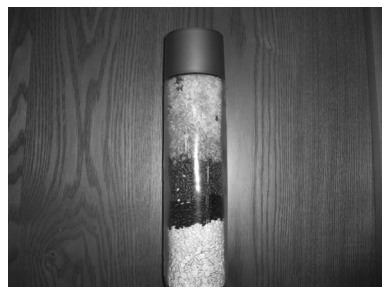
豆の種類



豆の標本



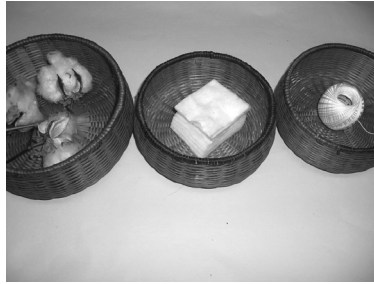
お米の種類



お米の標本



ソバの実とソバ粉



綿の実と綿と木綿糸



まゆと真綿



羊毛と毛糸



自然物だけのリース



色々な木の実の炭焼き